

## 夏の讚美 この頃の一日

よく晴れた朝である。

露にぬれた草叢や、瓜、茄子等の作られた畑には、朝の靈氣がただようている。畑にはもう人が出て、茄子を取っている。

やがて、東の山から、夏の独裁官のような太陽が悠々と蒼空に上りはじめ。今日の暑さを思わせる。

書齋に朝の涼しい空気が流れて来る。心寂かに入れたお茶一服、念仏の朝はすかくしい。

ペンを持つて机に向えば、今日の仕事が続いている。これから仕事の中に自分を打ちこむのだ。健康から発散する精気が、今日一日の努力を約束する。

煙草に火をつけて、二十分、三十分、眼を内に転ずる。煩惱どもの朝の挨拶を受け。一一聞いてやつて、すっかり整理がすむと、仕事にかかる。講習会のプリントにまず手をつける。

夏の朝こそは、実に宝玉である。

風さへあまりない午後である。畑も、山も、樹木も、家も、灼熱の太陽の光に燃えに燃えている。

南の空には、入道雲がえも言はれぬ美しい色と形を山の上にあらわしている。ちつとも動かない。

坐っているのに汗がダラ／＼流れる。今日の暑さは又格別である。仕事に全体を打ちこめば、汗の中に暑さを忘れる。

流場の方からはバサ／＼とお洗濯の音が聞える。工場からはコツ／＼と活字の音がする。

夏の真昼には感傷が役立つたない。ゴマ化しが許されない。逃避にききめがない。白兵の接戦、力と力との押しあいだ。

少しでも怠けると、すぐ猛暑は骨の髄にまで食い入って来て、ぐにや／＼にする。仕事だ、動け、働け、クル／＼廻れ、何くそ！と腹に力を入れて立て。この真夏、そして真昼、彼は断じて彼に妥協を申し込むことを許さない。甘えさせない。ただ彼は

戦をいどむ。

だが、しかし、彼は決して無慈悲ではない。厳肅なる慈父である。力によって力をたたき込む。もし彼を避けてそむけば、彼は弱者として葬るのに躊躇しない。彼を受け入れて、彼になりきる時、彼は清水のような新鮮な喜びを与える。

あの青葉を見よ。野にも山にも緑のユニホームを著けた、彼への絶対服従者が雄々しくも生々と伸びている。青葉は力にみちた若者である。彼は春のような、秋のような、色彩の自由すら許さない。緑の一色！伸びるか、枯死か。

そこに男性的な、夏の魅力がある。我は夏を好み、夏を喜び、夏を讚美する。

子供らが真黒に焦げて海から帰る。子供は夏の愛児である。彼等は焦げた皮膚を気にしない。クリームをぬって海水に入らない。夏は正直にして赤裸々、勤勉にして

筋の太い人間を愛する。しかして子供こそは、それらを備えている。彼が愛するものも無理はない。

「先生、お風呂がわきました。」午後五時、少し早すぎるが、頭には疲れの毒素がたまっている。ペツタリ坐つて、熱い湯で汗と油を流す。

時に一陣の風が訪れる。夏にのみ味い得る千万金、一日の疲れもどこへやら消える。

しみじみと、健康な体を見て、生きることの嬉しさを思う。

午後六時半、夕べの勤行の時が来る。私にとつて、一日中で、一番うれしく、尊く、懐しく、有難く、ぴつたりとするありがたい時である。

「人身受けがたし、今すでに受く、仏法聞き難し、今すでに聞く……。」

新本部の仏前、あのステージは全くの無風地帯である。一日中の熱気がまだ去らない。聖勤をすすめていると、多汗な体からは滝のように汗が流れて、いつしかに上半身を水につかったようにする。だがこの時間、ハンカチを持たない。扇子を持たない。

ただ、端座。汗よ、出でよ、流れよ。合掌。腹からの声でお経を上げる。何という涼しさだ。何と云うありがたさだ。暑さはいつたい、どこに在るのだ。

勤行がすみ、夕食が来る。夏は特に食事を甘味く頂くことが必要、よく噛んでたくさん食べないようにすること。夕食時間三十分、粗末なものでもおいしく頂ける。

夕食がすんで、屋外にたたずむ。

美しい西の空、やがて東の山から白銀の月が現れる。

まだ大地のほてりは去らないが、吹く風は涼しい。

誰かが歌う歌の音が聞える。

夕方の一時は憩いの一時である。

一日中働いた者への慈父の御褒美である。

五十ワットの明るい電燈の光が、机の上の銀杏の緑の葉を造花のように浮び出す。

北側の窓から涼しい風が訪れる。

達者な子供たちは寢床の催促をしている。

月の光が淡く照して、月見草をほのかに見せている。

もう虫の音が叢に聞える。

夏の夕べは、あまりにも、華美なねぎらいである。

まったく日が暮れる。

私は再び机の人になる。原稿、十時すぎるとそろそろ静まってくる。

ぽつぽつ安らかな寝鼾が聞えたり、おかしい寝言も聞えて来る。

左側の住宅地帯には、番犬たちが何に驚いたか一斉にほえる。

静かだ。鉄瓶の湯の音がする。

私が繰る紙の音、ペンの音、そのみが室一ぱいにひびく。

十一時、十二時、ついに一時、誰にも、何にも妨げられず、經典を頂き、古来の聖賢と語り、考えねり、読み、書く、全く私にとつての至尊、至重の時である。

時には眼をあげて、各地の同胞と語り、時には、悠久なる法界を憶う。

十方無量の諸仏、菩薩、念仏の中に我を護念証誠したもうを憶い、法に値うことの幸を一人つぶやく。南無阿弥陀仏！

かくして静かに寢床に横たわる。

ああ、今年もまた、夏に会い得た幸を憶う。

夏よ、私の最も好きな夏よ。

暑くてあれ。もつとく暑くてあれ。

我はおん身の心に生きる